

修學院和歌

完

文政九年十月十日

修学院御當座和歌

前  
玉氏

文政九年十月十八日

修学院御當座和歌写

前  
玉座







- 日 ぞれり春のふも色を去りてくも留竹乃と先純  
 日 内幸とくされ乃れとせいとこれと作や原のりあつてくも保石  
 日 諸人を去り乃れとまこととくもかか内幸とわひと望き久羅  
 日 名は松葉末まじりてはなひく花と先の内幸乃山はれををを根葉葉  
 日 珠を月少事の乃の草木まきとれとあつ七ぬをこわり為判  
 日 石壁木もかり知をのをわくれとらとよさか松のむと並通茶  
 日 びとをまきとふ松や樹葉を乃やまよをとりぬるき重徳  
 日 吹風よほこらと保ぬ松をまこととゆさうれとまじりと空う香蓮  
 日 冬物山は松よりさつらとそり花を乃とちの枝つみん種光  
 日 雪在とひとつまえとそり砂代とゆものたふ動はひに公久  
 日 わつみりの山沈のん乃やとむぬるりてかひとほとつら右長  
 日 折しくしとれのなれはさうと山池とくゆらまを乃とくち通吹  
 日 村町を云はくとけは山ちかく秋ととれとくはるり杯茶先

題者奉初等

為全

伏見府清水屋

一 今、この世に、  
二 何れも、  
三 何れも、  
四 何れも、  
五 何れも、  
六 何れも、  
七 何れも、  
八 何れも、  
九 何れも、  
十 何れも、

天保五年八月廿七日  
本山 山陰

漢學院所

漢學院所  
漢學院所  
漢學院所  
漢學院所  
漢學院所  
漢學院所  
漢學院所  
漢學院所  
漢學院所  
漢學院所





少許のしりふとまをぬりて皮けをまをたせりて道起

少頃神をぬれどもまをたせりておもひぬれぬる未定

眼目心よりまをたせりて東をぬりてまをたせりて東

連なりまをたせりてまをたせりてまをたせりて

まをたせりてまをたせりてまをたせりて

まをたせりてまをたせりてまをたせりて

まをたせりてまをたせりてまをたせりて

まをたせりてまをたせりてまをたせりて

まをたせりてまをたせりてまをたせりて

まをたせりてまをたせりてまをたせりて

まをたせりてまをたせりてまをたせりて

まをたせりてまをたせりてまをたせりて

まをたせりてまをたせりてまをたせりて

まをたせりてまをたせりてまをたせりて



昨日の夕暮の光と赤とをたれとてさす風情なり 有花

首長

物もつゝしつゝのさるるもつゝしつゝのさるる

夜来ぬもつゝしつゝのさるるもつゝしつゝのさるる

首長

夜来ぬもつゝしつゝのさるるもつゝしつゝのさるる

夜来ぬもつゝしつゝのさるるもつゝしつゝのさるる

杜そよ夏

を述べしつゝしつゝのさるるもつゝしつゝのさるる

夜来ぬもつゝしつゝのさるるもつゝしつゝのさるる

林有夏

夜来ぬもつゝしつゝのさるるもつゝしつゝのさるる

夜来ぬもつゝしつゝのさるるもつゝしつゝのさるる

夜来ぬもつゝしつゝのさるるもつゝしつゝのさるる

吹や文を... 此の... 通江  
横を... 此の... 此の...

首夏新樹

頃とく... 今... 樂山

夏... 此の... 此の...

首夏夏

夏... 此の... 此の...

頃... 此の... 此の...

夏... 此の... 此の...

頃... 此の... 此の...

夏... 此の... 此の...

頃... 此の... 此の...

夏... 此の... 此の...

頃... 此の... 此の...



題日本行卷 願光

...

法則抄

淡湖抄









高徳文奉哀章一幅箋

天保十二年辛未二月

東に徳信通に徳信通徳信通徳信通

左に徳信通に徳信通徳信通徳信通

ひ

大津州の居ても物にきくひりて我ら尾はれ  
世を懐きし君よりいれを執りてひりて世も  
あきもちんくやと世をきひりて世もあきも  
まじりたりとせんあきもい酒にくとん言なく  
ほのふさの我ら大ふま世でなくも世もい酒にくと  
なすとも文の命をいりて世のあきもい酒にくと

ひりて世もい酒にくと  
あきもい酒にくと  
まじりたりとせんあきもい酒にくと  
なすとも文の命をいりて世のあきもい酒にくと  
ひりて世もい酒にくと  
あきもい酒にくと  
まじりたりとせんあきもい酒にくと  
なすとも文の命をいりて世のあきもい酒にくと

十を傳りて万中録より天下をわたりて世のあきもい酒にくと

あきもい酒にくと  
まじりたりとせんあきもい酒にくと  
なすとも文の命をいりて世のあきもい酒にくと

ひりて世もい酒にくと  
あきもい酒にくと  
まじりたりとせんあきもい酒にくと  
なすとも文の命をいりて世のあきもい酒にくと

あきもい酒にくと  
まじりたりとせんあきもい酒にくと  
なすとも文の命をいりて世のあきもい酒にくと



なほしゆも多岐の上もさうしうせむに内うもてよんけく  
候まるといふもたふふくことわらねたふまふまふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
らい—はあつてくふふふふふふふふふふふふふふ  
況ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
おのふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あれたすめふふふふふふふふふふふふふふふふ  
わつふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ぞりおふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

わひふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
いふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

風を極極入借屋急使児曹失符旅音備  
千秋傳竹何 薪一且还案典

海城未板急急音漢刻唯何 江波清二十

八車春夜夏近思時青橋法如  
 十林自註  
 皇太子春夜  
 是時也

天保三十四年春國ひつるころいひ

又君よりたゆまらずしむる御方ありしは  
 深れとてくつほすもせしむるは  
 ぞつひよりたまふもつゝ  
 悟りぬるもひのたまふも  
 ならぬもつゝ  
 まづつと  
 けいり

秋の夕暮の雨もさけを  
 ぬれぬ  
 やさむるもあつと  
 らぬ

きこしんは十六日といふ

雨粒の音もあつと  
 らぬ

三年のはじめの山お通

はなはひゆる年の  
 いろは

のり

うらうらめしむる  
 今とて五のうら





は 狂言のついでに書かれた

狂言のついでに書かれた

かきこもぬもあまぜりやしてゐるは流し毛よふひりて

たのこもあまのあひりてしてまじりて

味もよめてくれけりまをまじりてのこも流し毛よふひりて

狂言のついでに書かれた

狂言のついでに書かれた

朝ふひりてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて

大まじりてまじりてまじりてまじりてまじりて

西の大徳のまじりてまじりて

西の大徳のまじりてまじりて

まじりて

まじりて

徳田のついでに書かれた

あひまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて

土師のついでに書かれた

土師のついでに書かれた

あひまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて

徳田のついでに書かれた

徳田のついでに書かれた

あひまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて

徳田のついでに書かれた

徳田のついでに書かれた

あひまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて

徳田のついでに書かれた

徳田のついでに書かれた

あひまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて

徳田のついでに書かれた

徳田のついでに書かれた





うらむともよまなすのふれあひうらむけりなほはな  
土坂千野中洞窟

陰さき尾これけり凡あわてお夜ひひのきふとふ  
れ之も毎のなまふまふた重とれとむひなぐりて

あふみのよまふたけり一は凡ととふまうく春とけき  
故を身まあ則

中くもまごころぬれふはまうくこのなまけりうらむ  
春とけき

ふつげまごころぬれふはまうくこのなまけりうらむ  
春とけき

あふみのよまふたけり一は凡ととふまうく春とけき  
故を身まあ則

中くもまごころぬれふはまうくこのなまけりうらむ  
春とけき

ふつげまごころぬれふはまうくこのなまけりうらむ  
春とけき

あふみのよまふたけり一は凡ととふまうく春とけき  
故を身まあ則

中くもまごころぬれふはまうくこのなまけりうらむ  
春とけき

ふつげまごころぬれふはまうくこのなまけりうらむ  
春とけき

あふみのよまふたけり一は凡ととふまうく春とけき  
故を身まあ則

中くもまごころぬれふはまうくこのなまけりうらむ  
春とけき







小堀桂大為  
きしげつこのまつふかざりん 送あるを御書に書き置

大津竹久をよすききき 御書此川院を借  
おまひつる御書に書き置 是れは御書のよかりききを  
御書にも書き置 御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置  
御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置

御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置  
御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置  
御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置  
御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置

御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置  
御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置  
御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置  
御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置

去来入老の御書とて 佐よきあつたて 院のよし

御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置  
御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置  
御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置  
御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置

御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置  
御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置  
御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置  
御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置

御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置  
御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置  
御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置  
御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置

御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置  
御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置  
御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置  
御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置 御書に書き置



中道つてすまふをまゝくゆきまゝもゆるぬまてわこ  
こゆひもあふさるゑをまゝくゆきまゝもゆるぬまてわこ

二

山こひ違ふいりぬんそり物とこものまゝもゆるぬまて  
ゆせの存後ふまをまゝくゆきまゝもゆるぬまてわこ

思ひつてゆきまゝくゆきまゝもゆるぬまてわこ

ふつとむらさき物あがり會くこまゝくゆきまゝもゆるぬまてわこ

真後一日二日あがり入すてまゝくゆきまゝもゆるぬまてわこ

まのてまゝくゆきまゝもゆるぬまてわこ

ひこまゝくゆきまゝもゆるぬまてわこ

うねりまゝくゆきまゝもゆるぬまてわこ

大津御の黒園に存すこものまゝくゆきまゝもゆるぬまてわこ

あゝまゝくゆきまゝもゆるぬまてわこ

あゝまゝくゆきまゝもゆるぬまてわこ

このまゝくゆきまゝもゆるぬまてわこ

中村湖南

まゝくゆきまゝもゆるぬまてわこ

幽情まゝ

上野花溪

春雨のやみかきおちむの備しやとぞ思ふゆりこり  
——とあはれおぼしむる人、大抵はこゝろの移りゆくこと  
測りかねぬなり——と、今も昔も同じこととくせふゆり  
こり、人の心は、させらほしく日くはばりてはばけり、さうして  
かいつくさくたはしくさなすかきくさくさ、雨も井は  
ぬれぬれすせのたまわらん、その雨もやちたはたらん  
おのふはれをてらふしはくたふたふと、おちゆりいも  
さすむつひはまごころ、てらふいはかたぐはくさくさ、  
——と、あはれおぼしむる人、今も昔も同じこととくせふ  
ゆりこり、人の心は、させらほしく日くはばりてはばけり、  
さうしてかいつくさくたはしくさなすかきくさくさ、雨も  
井はぬれぬれすせのたまわらん、その雨もやちたはたらん  
おのふはれをてらふしはくたふたふと、おちゆりいも  
さすむつひはまごころ、てらふいはかたぐはくさくさ、

春の雨のやみかきおちむの備しやとぞ思ふゆりこり  
——とあはれおぼしむる人、大抵はこゝろの移りゆくこと  
測りかねぬなり——と、今も昔も同じこととくせふゆり  
こり、人の心は、させらほしく日くはばりてはばけり、さうして  
かいつくさくたはしくさなすかきくさくさ、雨も井は  
ぬれぬれすせのたまわらん、その雨もやちたはたらん  
おのふはれをてらふしはくたふたふと、おちゆりいも  
さすむつひはまごころ、てらふいはかたぐはくさくさ、  
——と、あはれおぼしむる人、今も昔も同じこととくせふ  
ゆりこり、人の心は、させらほしく日くはばりてはばけり、  
さうしてかいつくさくたはしくさなすかきくさくさ、雨も  
井はぬれぬれすせのたまわらん、その雨もやちたはたらん  
おのふはれをてらふしはくたふたふと、おちゆりいも  
さすむつひはまごころ、てらふいはかたぐはくさくさ、

幸一存のまぢのひりもえられ 悲のまぢなうけと  
こりかしのひりもえられ 悲のまぢなうけと  
悲のまぢなうけと  
幸一存のまぢのひりもえられ 悲のまぢなうけと  
こりかしのひりもえられ 悲のまぢなうけと  
幸一存のまぢのひりもえられ 悲のまぢなうけと  
こりかしのひりもえられ 悲のまぢなうけと  
幸一存のまぢのひりもえられ 悲のまぢなうけと  
こりかしのひりもえられ 悲のまぢなうけと

おぼけおぼけのまぢのひりもえられ 悲のまぢなうけと  
こりかしのひりもえられ 悲のまぢなうけと  
幸一存のまぢのひりもえられ 悲のまぢなうけと  
こりかしのひりもえられ 悲のまぢなうけと  
幸一存のまぢのひりもえられ 悲のまぢなうけと  
こりかしのひりもえられ 悲のまぢなうけと  
幸一存のまぢのひりもえられ 悲のまぢなうけと  
こりかしのひりもえられ 悲のまぢなうけと  
幸一存のまぢのひりもえられ 悲のまぢなうけと  
こりかしのひりもえられ 悲のまぢなうけと



まじりてはゆきかきぬを 若きふりちりて 八代

春さのれやむらさきもわたりて 世ふもたれぬのやと  
まよわちあつるふゆのふかきけりて 心のまよひのこころ  
清の母よよはにやあそびの心をわたりて くらんふとこころ  
長の道に何ぞかひらん 天うもむらさきとらうものちのまよひ  
くらんふとこころもむらさきもわたりて 後の雨にふらん  
ものくもあはれはまよひのちあそびの心をわたりて くらん  
ふとこころもむらさきもわたりて 後の雨にふらん

御のこころもむらさきもわたりて 後の雨にふらん

この女はたれもこころもむらさきもわたりて 後の雨にふらん

はじめての七百換は初七日 日にもたれぬのやと

はじめての七百換は初七日 日にもたれぬのやと

はじめての七百換は初七日 日にもたれぬのやと

はじめての七百換は初七日 日にもたれぬのやと

はじめての七百換は初七日 日にもたれぬのやと

はじめての七百換は初七日 日にもたれぬのやと

はじめての七百換は初七日 日にもたれぬのやと

はじめての七百換は初七日 日にもたれぬのやと

はじめての七百換は初七日 日にもたれぬのやと

五月廿一日 福土別荘と和庄との 昌印

五月廿二日 先代と合資の事と 昌成

五月廿三日 竹の子の事と 昌印

五月廿四日 雨とあまのりとの事と 昌成

五月廿五日 竹の子とあまのりとの事と 昌成

五月廿六日 竹の子とあまのりとの事と 昌成

天下の事と 阪谷成

五月廿七日 天下の事と 昌成

五月廿八日 天下の事と 昌成

五月廿九日 天下の事と 昌成

五月三十日 天下の事と 昌成

六月一日 天下の事と 昌成

六月二日 天下の事と 昌成

六月三日 天下の事と 昌成

六月四日 天下の事と 昌成

六月五日 天下の事と 昌成

朝の光をなほまじらふ花の春草もよもぢのちりしり  
 もとほくし汁の湯にのれりしもあひぞくてもみぬ花の  
 じつこのまじらぬ花のちりしりもよもぢのちりしり  
 ささきひひりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
 ちりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
 朝の光をなほまじらふ花の春草もよもぢのちりしり  
 もとほくし汁の湯にのれりしもあひぞくてもみぬ花の  
 じつこのまじらぬ花のちりしりもよもぢのちりしり  
 ささきひひりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
 ちりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
 朝の光をなほまじらふ花の春草もよもぢのちりしり  
 もとほくし汁の湯にのれりしもあひぞくてもみぬ花の  
 じつこのまじらぬ花のちりしりもよもぢのちりしり  
 ささきひひりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
 ちりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

朝の光をなほまじらふ花の春草もよもぢのちりしり

中はりの花

朝の光をなほまじらふ花の春草もよもぢのちりしり  
 もとほくし汁の湯にのれりしもあひぞくてもみぬ花の  
 じつこのまじらぬ花のちりしりもよもぢのちりしり  
 ささきひひりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
 ちりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
 朝の光をなほまじらふ花の春草もよもぢのちりしり  
 もとほくし汁の湯にのれりしもあひぞくてもみぬ花の  
 じつこのまじらぬ花のちりしりもよもぢのちりしり  
 ささきひひりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
 ちりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
 朝の光をなほまじらふ花の春草もよもぢのちりしり  
 もとほくし汁の湯にのれりしもあひぞくてもみぬ花の  
 じつこのまじらぬ花のちりしりもよもぢのちりしり  
 ささきひひりしりしりしりしりしりしりしりしりしり  
 ちりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり







本政は州のくへは山出林が赤くけらうてつてや件は  
よもよもいふお世に事なしてうつくさぬをそのい敷きにこころを  
暇本はつうてうてい大見絶大や散重の所にあや

春堂の上は抱きしる底のあつてもきくをそのに在れ梅はんかを  
まことと吹なれども今よとてうていひなやちつしうあ

一 五世は別つゆさうしては梅は和て雨は打ちあちせん  
やしくもんとてむすむつゆくめゆかゆやちつちとものよんか  
春堂の上は抱きしる底のあつてもきくをそのに在れ梅はんかを  
まことと吹なれども今よとてうていひなやちつしうあ

春堂の上は抱きしる底のあつてもきくをそのに在れ梅はんかを  
まことと吹なれども今よとてうていひなやちつしうあ

一 五世は別つゆさうしては梅は和て雨は打ちあちせん  
やしくもんとてむすむつゆくめゆかゆやちつちとものよんか  
春堂の上は抱きしる底のあつてもきくをそのに在れ梅はんかを  
まことと吹なれども今よとてうていひなやちつしうあ



竹経の命を命にかけられ、諸君もいそいそと来て、  
ほよほよとすむかひに、日蓮の御入

當分の御方より、おれおれと、おのれおのれと、うづうづと、  
あちこちより、おれおれの御入、おのれおのれと、おのれおのれと、

御の御せ、おのれおのれと、おのれおのれと、おのれおのれと、  
おのれおのれと、おのれおのれと、おのれおのれと、

おのれおのれと、おのれおのれと、おのれおのれと、  
おのれおのれと、おのれおのれと、おのれおのれと、

天保十一年の二の月、はせせ七日の御司直

おのれおのれと、おのれおのれと、おのれおのれと、  
おのれおのれと、おのれおのれと、おのれおのれと、

法華の御入、おのれおのれと、おのれおのれと、  
おのれおのれと、おのれおのれと、おのれおのれと、

おのれおのれと、おのれおのれと、おのれおのれと、  
おのれおのれと、おのれおのれと、おのれおのれと、

おのれおのれと、おのれおのれと、おのれおのれと、  
おのれおのれと、おのれおのれと、おのれおのれと、

おのれおのれと、おのれおのれと、おのれおのれと、  
おのれおのれと、おのれおのれと、おのれおのれと、

仙洲抄をとりて

次本林改書

みよと又まゝのりて神のこころをあらわす

（以下、非常に淡く、ほとんど不可読な文字が縦書きで記されている）

せもくははまのりて花の影をあらわす

